

史料にみる丹波黒大豆の300年（その2）

島原 作夫

減反政策下の丹波黒大豆

—昭和中期から平成期—

多紀郡（現 兵庫県篠山市）における黒大豆の作付面積は、昭和初期20ha、昭和20年代後期10ha程度、昭和35年頃10haで特産物として作られていた。兵庫県全体の丹波黒大豆の面積は、昭和41年産で22ha（主要農作物奨励品種改廃協議会資料、1967）であった。昭和40年代はじめ、京都を含めても、兵庫と京都の丹波地方を中心に数十ha作付されていたに過ぎなかった。まさに丹波黒大豆は消滅寸前であった。

昭和30～40年代はじめの多紀郡における丹波黒大豆の面積の伸び悩みは、競合作物である水稲との間の収益の差、つまり昭和30年以降、水稲の単収（単位面積当たり収量）は向上し、米価も上がったが、黒大豆は単収が停滞し、水稲は黒大豆より収益性の高い作物であったためである。

しかし、減反政策が始まると状況は一変した。昭和50年産以降の現主産県の丹波黒大豆の作付面積の推移（図1）をみてみよう。

丹波黒大豆は、昭和50年以降、作付面積が急増していることが読み取れる。昭和

50年産で京都府89 ha、兵庫県64ha、計153haであったが、その後、岡山県、滋賀県、香川県においても作付けされ、面積は急増し、平成24年産では兵庫県1,562 ha、岡山県1,052 ha、京都府295 ha、滋賀県200 ha(推定)、香川県47 ha、計3,156haとなっている。

丹波黒大豆の全国作付面積一位（平成24年産）は兵庫県であるが、県内市町で作付面積一位は篠山市である。篠山市における丹波黒大豆の作付面積は、昭和54年産130ha（推定）から平成24年産641 haと急増した。

昭和50年以降、丹波黒大豆の面積が急増した要因は、減反政策である。減反政策は、米過剰対策として昭和46年から本格実施された。転作目標面積の増加（全国の転作目標面積：昭和50年度238千ha、平成15年度1,018千ha）に比例して、丹波黒大豆は収益性の高い転作物として面積が拡大していった。丹波黒大豆は、まさしく転作対応作物であった。

丹波黒大豆の生産拡大とともに、主産県で優良系統の選抜が、丹波篠山では地域団体商標の取得が行われた。

多紀郡における黒大豆の栽培面積は、昭和初期から35年頃まで10~20haの規模で推移していたが、丹波黒大豆は在来種で遺伝的に雑ばくな集団であった。兵庫県では平成元年に大粒の「兵系黒3号」が純系分離により育成され、順次普及していった。京都府においては昭和56年に「新丹波黒」、岡山県は平成16年に「岡山系統1号」、香川県は平成19年に「香川黒1号」が同様な方法で育成された。

兵庫県、岡山県などにおける丹波黒大豆の急増によって、丹波篠山の丹波黒大豆を他の地域のものとの差別化を図ることが必要になってきた。そこで丹波ささやま農協は地域団体商標「丹波篠山黒豆」を平成23年7月29日に黒大豆ではじめて取得した。

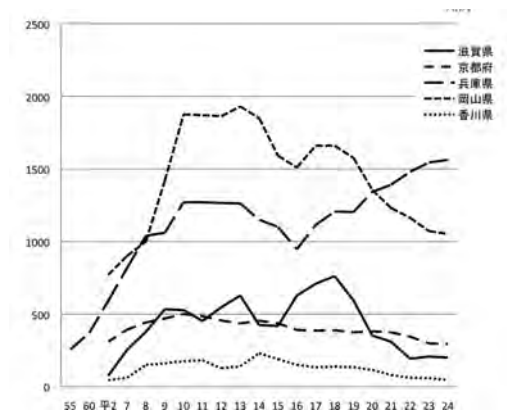


図1 丹波黒大豆の作付面積の推移 (主産県)

注：滋賀県の平成21年産までの面積には一部早生系統を含む。

出典：近畿農政局HP・中四国農政局HPの大豆に関する情報、香川県「大豆の生産に関する資料(平成24年3月)」等。

川北黒大豆と波部黒大豆の特性

さきにみてきたように、江戸中期から明治の中頃にかけて、多紀郡(現篠山市)、丹波国の黒大豆は、

「黒豆 丹州篠山よし」(料理綱目調味抄、享保15〔1730〕年)

丹波国名産「黒大豆」(丹波国大絵図、寛政11〔1799〕年)

「黒豆 川北ノ産ヲ善ク煮テ皮切レズ」(多紀郡明細記、嘉永5〔1852〕年)

丹波国多紀郡川北村産 黒大豆「名声アル…」(博覧会物品概説〔豊岡懸〕、明治5〔1872〕年)

多紀郡日置村 波部本次郎の出品した黒大豆「波部黒」が第三回及び第四回内国勸業博覧会で入賞(明治23〔1890〕年、明治28〔1895〕年)

と名声を博していた。

それでは、川北黒大豆と波部黒大豆はどんな特性を有していたのだろうか、また、両黒大豆にはどんな違いがあったのだろうか。

特性を記した資料として、明治32年(1899)の兵庫縣多紀郡農事試験場の成績が残っている(図2)。

黒豆(八月黒大豆は収穫日が8月のため除く)の成績をみると、

「粒形は、最大 波部黒大豆>大 川北黒大豆・大 日置金時一反歩当たり収量は、波部黒大豆2石1斗8升4合>日置金時1石8升7斗8合>川北黒大豆1石7斗4合莖稈重量は、波部黒大豆>日置金時>川北黒大豆」

図2 兵庫県多紀郡農事試験場「農事試験成績」抜粋（明治32〔1899〕年、国立国会図書館蔵）

となっている。

波部黒大豆が最も粒径が大きくかつ収量性に優れ、また、波部黒大豆の茎稈重量は、川北黒大豆の1.41倍、日置金時の1.26倍あることから、波部黒大豆は川北黒大豆や日置金時より草姿が大きかったと考えられる。

この成績中に日置金時があるが、明治28年の内國勸業博覧會の出品リストに「當時出品ノ黒大豆ハ宮内省ヨリ御買上ゲノ光榮ヲ得タリ。種類ニハ波部黒大豆、金時黒大豆一名、八黒、霜降白大豆一名腹切大豆ノ三種アリテ波部黒ハ普通ノ大豆ヨリ一石ニ付式園餘ノ高價ニ買取ラル。」(多紀郡誌)と金時黒大豆があること、「多紀の産物歴史」(篠山市立図書館蔵)に年代は不明であるが「丹波名産 川北金時黒」を表示した多紀郡笹山二階町の雑穀商の広告があることから、多紀郡では、明治の中頃から後期にかけて川北黒大豆、波部黒大豆のほか、金時黒大豆も栽培されていたと推定される。

丹波黒大豆、丹波黒という名称

江戸後期から大正時代にかけて、多紀郡の黒大豆は、川北黒大豆（または河北黒大豆）、波部黒大豆と称されていたが、いつから、どのようにして丹波黒大豆と称せられるようになったのだろうか。文献を年代順に整理したものが表1である。これをみると、昭和6年には、地域名と商品名からなる丹波黒大豆の名称が使用されている。そして、昭和9年の名称統一、昭和16の「丹波黒」命名によって、丹波黒大豆、丹波黒という名称が定着していったと考えられる。

おわりに

本稿は、300年の歴史を有する丹波篠山の黒大豆について、どのように丹波篠山で黒大豆の栽培が始まったのか、どのように江戸時代中期から現在まで黒大豆は作り継がれたのか、を史料から整理・検討したものである。本稿で述べたことを要約すると次のようになる。

(1) 江戸時代前期、多紀郡では水不足による旱害を緩和するために犠牲田を設けた。その犠牲田の有効利用を図ろうと「堀作」を行った。犠牲田に栽培する作物は原則として貢租対象物たる大豆作が強制された。最も早く犠牲田が生じ、その面積が最も大きかった川北村で、川北黒大豆が生まれたのである。

(2) 江戸末期から明治時代にかけて、豪農大庄屋の波部六兵衛と継嗣波部本次郎によって、優良な黒大豆の種が作られ、「波

表1 丹波黒大豆に関する年代別文献整理表

嘉永5 (1852) 年	多紀郡明細記	「黒豆 川北ノ産ヲ善ク煮テ皮切レズ」
明治4 (1871) 年	多紀郡誌	波部本次郎、原々種として日置村に…良種を作り波部黒と名づけ郡内一般に配布
明治5 (1872) 年	博覧会物品概説、豊岡縣	丹波国多紀郡川北村産 黒大豆「名声アル…」
明治32 (1899) 年	兵庫県多紀郡農事試験場「農事試験成績」	波部黒大豆、河北黒大豆等の種類試験
昭和6 (1931) 年	昭和6年度京都府立農事試験場業務功程	大小豆品種比較試験の品種名欄に「丹波黒大豆」が記されている（川北黒大豆、波部黒の名称は記されていない）。
昭和9 (1934) 年	篠山町百年史 (1983)	「名声が高まると、従来 of 「川北大豆」「波部黒大豆」という名称が支障になり、昭和九年に至り、郡農会の斡旋により「丹波黒大豆生産出荷組合」を組織して“丹波黒大豆”と統一して今日に至ったものである。」
昭和16 (1941) 年	兵庫県農事試験場	兵庫県農事試験場は丹波地方で栽培されていた黒大豆の在来種（波部黒）を取り寄せ、品種比較試験の結果、1941年（昭和16年）に「丹波黒」と命名し、奨励品種とした。
昭和28 (1953) 年	永田忠男1953、丹波黒大豆の栽培に関する2,3の考察、兵庫農科大学研究報告	「現在郡内に於いては、南河内村川北及び日置村曾地附近に良品を産する。前者を川北大豆と称し、後者は普及に尽力した豪農波部氏に因んで波部黒（ハベグロ）と称する。然し兵庫県農事試験場は多紀郡在来種を品種比較試験の結果奨励品種とし、丹波黒と命名したので、本報文においては多紀郡下に産する黒大豆を一括して丹波黒大豆と称する事とする」

部黒」と名付けて奨励された。多紀郡の黒大豆の名声は高まっていったが、需要を満たす生産量を確保できなかった。しかも、多紀郡内には「波部黒」と「川北大豆」の銘柄があった。そこで、2つの銘柄を「丹波黒大豆」という名称に統一した。

(3) 江戸時代、多紀郡の黒豆は「黒豆 丹州笹山よし」(1730)、篠山藩青山家の時献上、寒中の黒大豆 (1846,1856)、「黒豆 川北ノ産ヲ善ク煮テ皮切レズ」(1852)と名声を博した。明治から昭和の中期にかけても、「多紀郡黒大豆ノ販路ハ東京大阪京都地方ニシテ…」(明治後期)、川北黒大豆は「現在においても東京、京都は勿論、

全国各地より注文があり」(1952)と高い評価を得、特産物として栽培された。

(4) 昭和46年からの減反政策の本格実施を契機に、丹波黒大豆は収益性の高い作物として注目され、篠山市をはじめ兵庫県、岡山県等で作付面積が急増した。丹波黒大豆の生産拡大とともに、現主産県で優良系統の選抜が、丹波篠山では地域団体商標「丹波篠山黒豆」の取得が行われた。

(5) 以上を総括すると、丹波篠山の黒大豆は、川北村の犠牲田から生まれ、各時代に高い評価を得ながら、江戸時代は犠牲田で貢租対象物として、明治から昭和時代中期は町村単位の特産物として、昭和46年

以降は減反政策下で収益性の高い作物+市(郡)単位の特産物として、300年作り継がれたのである。

今後、丹波篠山の黒大豆が各時代に高い評価を得た要因を調べる必要がある。

文献

- 1) 岡光夫1954、近畿山間部における溜池灌漑の歴史的研究、兵庫農科大学研究報告、農学編1(2)：141-148
- 2) 兵庫県史編集委員会1967、「兵庫県百年史」兵庫県、185
- 3) 兵庫県農林水産部農地整備課編1984、「兵庫のため池」兵庫県、457-458

4) 岡光夫1963.「封建村落の研究」有斐閣、96

5) 岡光夫1963.「封建村落の研究」有斐閣、98-99

6) 岡光夫1963.「封建村落の研究」有斐閣、96-97

7) 松本静治、吉川正巳2010、転換畑における黒ダイズの連作にともなう収量および土壌の科学性の変化、日作紀79：268-274

8) 篠山町史編集委員会1983.「篠山町百年史」兵庫県篠山町、144

9) 永田忠男1953、丹波黒大豆の栽培に関する2,3の考察、兵庫農科大学研究報告、農芸化学編、1(1)：9-12

附表 史料にみる丹波黒大豆の300年表

西暦	和暦	事項	出典
1603～ 1661	慶長8年 から寛文	多紀郡（丹波国篠山藩）においては溜池の造営が江戸初頭から寛文に至る数十年間に於て精力的に行われたのである	岡光夫「近畿山間部における溜池灌漑の歴史的研究」
1655～ 1657	承応4年から 明暦3年	多紀郡（丹波国篠山藩）五坊谷池（別名倉本池）の築造	兵庫のため池誌（1984）
1716	享保元年	篠山藩の土産として「黎豆」	篠山封疆志
1718	享保3年	奉願堀蒔大豆田之事（多紀郡垂水村）	岡光夫「封建村落の研究」
1718	享保3年	堀作が土地を肥沃化せしめることを農民が認識（多紀郡垂水村）	岡光夫「封建村落の研究」
1730	享保15年	座禅豆 かたく煮るハ豆を布巾にてふきて生漿にて炭火にて煮るくろ豆ハ丹州笹山名物なり	料理綱目調味抄
1730	享保15年	黒豆 丹州笹山よし	料理綱目調味抄
1748	延享5年	篠山藩が堀作停止の命、多紀郡大庄屋一同堀作継続の願、藩が堀作の継続を許す	岡光夫「封建村落の研究」
1758頃	宝暦8年頃	多紀郡内 特産黒大豆献納の始め	多紀郡誌（1918）
1799	寛政11年	丹波国名産「黒大豆」	丹波国大絵図
1831	天保2年	波部六兵衛（黒大豆）良種を精選して郷の各所に配布	多紀郡誌
1831	天保2年	（篠山藩主）青山忠裕黒大豆の栽培を奨励す	増訂丹波史年表
1846	弘化3年	篠山藩から幕府への時献上の品 黒大豆	弘化武鑑
1852	嘉永5年	「黒豆 川北ノ産ヲ善ク煮テ皮切レズ」	多紀郡明細記
1853	嘉永6年	多紀郡八上新村（現篠山市日置）で全村の2割の堀作実施	岡光夫「封建村落の研究」
1856	安政3年	篠山藩から幕府への時献上の品 黒大豆	安政武鑑
1871	明治4年	波部本次郎 原々種として日置村に・・・良種を作り波部黒と名づけ郡内一般に配布	多紀郡誌
1872	明治5年	川北村産 黒大豆、名声ある…	博覧会物品概説（豊岡縣）
1890	明治23年	波部氏 波部黒を第三回内国勸業博覧会に出品 三等有功賞	多紀郡誌
1891	明治24年	大豆 産地 著名なるものは南河内村の内川北村及び城南村の内谷山村とす	兵庫県著名農産物栽培録
1895	明治28年	波部氏 波部黒を第四回内国勸業博覧会に出品 有功二等賞、宮内省よりお買上げ	多紀郡誌
1899	明治32年	波部黒大豆、河北黒大豆等の種類試験	兵庫県多紀郡農事試験場「農事試験成績」
	明治後期	多紀郡黒大豆ノ販路ハ東京大阪京都地方ニシテ収納期ニ至レバ京阪地方ヨリ多數ノ商人入込ミ各農家に就キテ買取ル有様ナリ。但郡内ノ耕作區域狭小ニシテ多數ノ需要者ノ希望ニ應ズルコト能ハザルヲ遺憾トス。	多紀郡誌
1919	大正8年	大正八年産 川北名産黒大豆 生産者 丹波多紀郡川北村 大西重蔵 のレットル	多紀の産物歴代
1927	昭和2年	多紀郡 産物には黒大豆が年三萬数千圓にのぼり	兵庫県郷土美談
1931	昭和6年	丹波黒大豆の地方適応試験	京都府立農事試験場業務病程
1934	昭和9年	多紀郡の川北黒大豆、波部黒大豆の名称を、丹波黒生産出荷組合を組織して、丹波黒大豆に統一	篠山町百年史
1941	昭和16年	本懸には丹波黒大豆と云ふ品質に於ては日本一とも云ふべき大豆があるが……	農會通信（兵庫農會刊）
1941	昭和16年	兵庫縣 「丹波黒」と命名し、奨励品種に指定	
1952	昭和27年	日本一の川北黒大豆…、現在においても東京、京都は勿論、全国各地より注文があり	兵庫町村会編集・発行「お國自慢」
1968	昭和43年	兵庫縣 「丹波黒」の奨励品種（昭和43年度まで）	兵庫縣告示（昭和43年7月2日）
1971	昭和46年	減反政策の本格的実施	
1981	昭和56年	京都府 黒大豆「新丹波黒」育成	
1984	昭和59年	丹波黒枝豆の商品化（篠山市 小田垣商店）	
1989	平成元年	兵庫縣 黒大豆「兵系黒3号」育成	
2004	平成16年	岡山縣 黒大豆「岡山系統1号」育成	
2007	平成19年	香川縣 黒大豆「香川黒1号」品種登録	
2011	平成23年	丹波ささやま農協 地域団体商標「丹波篠山黒豆」を取得	